
禁断LOVE

コウユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

禁断LOVE

【Nコード】

N4840Z

【作者名】

コウユウ

【あらすじ】

この話は私の実話を元に作ったお話です。

結婚している二人…

不倫から始まりいろいろな困難を越えて二人は結ばれるのか

それとも現実に戻るのか…

ち
よ
っ
と
大
人
の
L
O
V
E
s
t
o
r
y
で
す

ブローグ

愛は朝からバタバタしていた。
今日は区内掃除の日。

毎日の朝の日課である掃除・洗濯を済ませ、
やっと化粧をしているところである。

旦那の大和はソファでコーヒーを飲みながら、優雅に朝からテレビを見ていた。

「今日の掃除行かないんでしょ？」

愛はくつろいでいる大和にいちよう聞いてみたが。

「どうして俺が行かないとだめなんだ。めんどくさい」

おもいどおりの返事が返ってきただけだった。

この家を建てたのが5年前。

団地内の行事があるときは愛が出席している
最初の半年ぐらいは大和が行っていたが。

一度愛が行ったきり行かないようになったのである。

「聞いたのが間違いだったわ」

愛は大和のそんな態度に腹がたったのか、
ブツブツと呟いた。

・・・

それから二人とも黙ったまま
いつもこんな感じではあるのだが…

「桜、向日葵そろそろおきて〜」

愛は化粧の手は止めずに、二階で寝ている子供達に向かって大声で
叫んだ。

しばらくして…

「はい、おはよ二人とも。早く用意してご飯食べて。今日は区内掃除の日だから、用意できたら行くよ」

桜と向日葵は、愛が機嫌悪いのを察したのか黙ったまま用意を始めた。

「出かけてくるぞ」

大和は急に立ち上がり、そっぴいながらリビングから出ていったのである。

休日でも大和は一人行動が当たりまえであった。

愛も子供達もそんな休日に慣れているせいか

大和が出ていくことに、なんの違和感もなかった。

愛と大和は結婚して12年になるが、夫婦の会話もなく、休日も別行動がほとんどだった。

「用意できたらいいこうか」

愛は子供達が用意できたのを確認したのか、ソファから立ち上がり玄関へ向かった。桜と向日葵も不機嫌な顔で愛に続いた。

区内掃除の集合場所の公園までは家から歩いて5分ほどである。

公園に着くともうかなりの人が集まっていた。

区内の決まりで不参加の家は5・000円罰金であるため、ほとんどの家に参加している。小学生は子供会があつて全員参加になっているため、かなりの人数である。

季節は2月初め。今日も雪が降りそうな曇り空である。

桜と向日葵は友達を見つけたのか、走っていった。

愛は一人になり震える腕をさすりながら立っていると、後ろから肩をたたかれた。

「おはよう」

愛が急に肩をたたかれたのでビックリして振り返ると、茜が笑顔で立っていた。

茜は愛と同じ会社に行っている同僚である。

家は近所で子供もよく似た歳である。

愛と性格が合うせいか、よく遊んだりしている。

「おはよう茜。今日も寒いよな」

「ほんと毎日寒いよな。どうしてこんな寒いのに掃除なんてしないのだめなんだろうね。自分の家も掃除してないのに」

「茜の家はほんと汚いよな。ちょっとは掃除しなよ。」

愛は綺麗好き、対して茜は掃除が苦手なのである。

「愛の家が綺麗すぎるんだよ。私も掃除してるんだからね。」
茜は苦笑いを浮かべている。

「まあ、茜はいろんなところに物をおきすぎなんだよ。もっと見えないところに片付けないと」

「だって見えるところにあつたほうがほしいときにすぐ見つかるでしょ。片付けちゃったら絶対どこにしまったかわからないよ」

茜は一人でうなずいて納得していた。

愛はそんな茜を見て呆れている。

「家事なんて真剣にやっても得にならないでしょ。旦那も子供も私がやるのが当たり前だと思ってるしね」

茜の言っていることは確かに当たつてある。

愛は自分が汚いのが嫌だから掃除や片付

けはやっているが、毎日ご飯作って洗濯して・・・。

子供は仕方ないとしても、旦那はそれが当たり前だと思っているのが腹が立つ。

「男ってほんと嫌な生き物だよね」

「ほんとだよ。付き合つてるときはめっちゃくちや優しかったのに。結婚したらまったく何もしない。ほんとどうにかしてほしいよあの男だけわ。」

愛と茜は合つたたびにこんな話をしている。

旦那の文句に関しては同感なのである。

茜も結婚して10年である。

愛の旦那と同様、家のことは何一つしてくれない。

「世の中の男ってみんなおんなじなんだろうかな。家のことは何もしない。仕事して疲れてるのなんて一緒なのに。」

「ほんとだよ。自分が仕事してなかったらまだ我慢できるけど……自分だけ仕事頑張ってるみたいな態度とるから余計に、腹が立つんだよね。」

愛も茜も思っていることは一緒のようであり、同じようにうなずいている。

「茜は癒しのダーリンがいるでしょ」

愛はそんな同じようにうなずいている茜を見てちよっと怒った顔でそう言った。

「まあ〜ね。隆雄は今の私をほんとに癒してくれるよ」

茜は急に嬉しくなったのか笑顔にかわった。

茜は旦那とは別に付き合ってる人がいるのだ。世間的にいう不倫だ。

「いいよなー茜は、そういう人いるから。私も探そうかな」

「そうしなよ。前の彼氏は良かったでしょ」

愛も数ヶ月前までは癒しの彼氏がいたのだ。

相手は独身者であったため、いつでも会うことができたし、何も気を使うことがなかった。

茜のほうは、既婚者ではあるが単身赴任をしているため独身者と対してかわらない。

「独り身は楽だけど、ずっと一緒には入れないからね。やっぱり次は結婚している人がいいな」

不倫というものは一線を越えてしまうと大変なことになってしまう。愛の彼氏はそんなことを恐れたのか、ややこしくなる前に別れを告げたのであった。

最初は気晴らし程度の付き合いだった愛ではあったが、一緒にいるとやっぱり感情がでてくるものである。彼氏はそんな愛の気持ちを察したのであろう。

「茜はどうなの！？隆雄とは？。うまくやってるの？」
愛は自分の過去を振り返りちよつと悲しい気分になった。

「いい感じだよ。隆雄は家で一人だからいつでも会いに行けるしね。嫁とも全然連絡とってないみたいだし」

「そうなんだ。いいよなやっぱり単身赴任は。どっちも結婚してたら先のことなんて考えなくていいんだもんね」

「そんなこともないよ。やっぱりずっと一緒にいると好きになっていくし、私のほうは旦那が近くにいるからね。あんまり下手なことしてばれちゃったら大変だしね」

茜はさっきの笑顔が嘘のように急に寂しい顔に変わった。

「でもばれなかったらずっと一緒にいれるじゃんか」

「そうなんだけど。ずっと一緒にいれても結婚できるわけでもないでしょ。だから辛いこともいっぱいあるよ。最近はずちの旦那にも怪しまれてるしね。」

「ばれないように気をつけなよ」

「そうだね……」

二人がいつものように話し込んでいる間に周りの人達が集まり始めた。

「あゝ掃除めんどくさいね」

「早く終わらして帰ろうよ」

二人は掃除が相当嫌なようで嫌な顔をしながら集まっている中に入ってしまった。

第1章 1

「おはようございます」

愛の職場は製造業の事務である。

向日葵が保育園に入ってからいろいろな仕事をしている。
今の仕事はちょうど2年になった。

茜は愛より3カ月ほど後に入ってきた。

二人とも旦那の扶養に入っているのでパートではあるが。

「おはよう」

愛想のない返事が帰ってきた。

職場の課長である小山だ。

もうすぐ定年間近のクソ親父。

ろくに仕事もできないくせに、口だけは偉そうであるためみんなに嫌われている。

本人はまったく気づいていないのだろうか。

愛が自分のデスクに座り、仕事の用意をしているとバタバタと茜が事務所に入ってきた。

「山本さん、もう少し早くこれないのかなあ」

小山が茜に向かってブツブツ言っている。

「おはよう愛」

茜は愛の隣である。

「おはよう茜。小山がブツブツ言っているよ」

愛は小山と茜を交互に見ながら笑っている。

「えゝなんか言ってた？全然聞いてないよ。まっ、聞く気もないけどね」

茜はあっけらかんとしているだけだ。

「そんなことはどうでもいいけど…昨日はほんとめんどくさかったよね。」

茜はもう小山のことなんて気にしていない。まっ、たくい性格である。

「そうだね。寒かったしね。」

「ねゝ愛さゝ。今週の土曜空いてる！？」

「別に家でいるだけだけど、どうしたの？」

「前の会社の飲み会に誘われたんだけど、一人で行くの嫌だから一緒に行ってくれないかなって思ってた」

「えゝ、私知らない人ばかりじゃん。」

「みんな同年代の人ばかりだよ。ついでに彩夏も誘ってるから。彩夏は同僚で二人とは仲がいい。」

「彩夏は彼氏探してるところだから喜んでたよ。愛もいい機会じゃない彼氏いるかもよ。」

茜は一人ではしゃいでいる。

「どんな人が来るの？」

「独り身もいるし、結婚してる人もいるよ」

「そうなんだ。まあ、気晴らしに行こうかな」

愛はあまり行く気にはなれなかったが、最近嫌なことだらけだったこともあり行くことにした。

「良かった。じゃ、楽しみにしててね」

「そこ二人、もう仕事始まってんだぞ。しゃべってないで仕事仕事。」

小山が叫んでいる。

「あゝ馬鹿が怒ってるわ。仕事しよ」

茜は小山のほうをちらつと見て、すぐに愛に向かって舌をだして笑った。

「あゝ仕事めんどくさいね」

愛と茜はデスクに向かって仕事を開始した。

その日の昼休み

愛と茜は、食堂で彩夏と一緒に昼を食べていた。

ここの食堂は、なかなか美味しくて安いため、会社でも人気である。

3人でランチを食べていると、目の前に男性が2人立っていた。

「ここ、いいかな」

茜の彼氏の隆雄だった。

「あら、松下さん。どうぞ」

茜が微妙な笑みを浮かべながら隆雄を見ている。

「どうも、山本さん」

隆雄もそんな茜を見ながら、微妙な笑いを浮かべている。

会社内では、いろんな人の目があるので普通に接しているのである。もちろん愛は知っているが、一緒にいる彩夏はまだ2人の関係を知らない。そして隆雄と一緒にいる男性、隆雄の部下の平下 徹も2人の関係は知らないのである。

愛と茜は、今の事務をする前に隆雄が所属する製造ラインで働いていた。

そのときに2人は意気投合したらしい。

愛も隆雄とは仲がいい。

「松下さん、そっちは忙しい？」

愛は2人のぎこちない行動を察したのか、隆雄に喋りかけた。

「…お、おう…最近結構忙しくてな。」

隆雄は動揺をかくしながら答えたが、ぎこちない喋り方になってしまった。

「どうしたんですか？松下さん。美人3人目の前にして動揺してるんですか？」

そんなぎこちない隆雄を見て、隣でいた徹がすかさず聞いてきた。

「私があまりにもかわいいからだよね」

愛がそんな隆雄と徹に向かって、笑いながらちよつとぶりっ子して

みた。

「あゝ気持ち悪いからやめて」

その返答は早かった。隆雄である。

愛と隆雄はいつもこんな感じである。

みんなそんな2人を見ながら笑っている。

「そんなことないですよ。愛さんかわいいですよ」

徹は独身者なのだが、結婚している愛に対して想いをよせているのである。そんな徹の気持ちは、誰にでもわかるぐらいにじみ出ている。

「ありがと、徹君。そんなこと言ってくれるの徹君だけだよ」

愛もそんな徹の気持ちは薄々感じていた。

直接は徹に言われたことはないが、みんなわかっているため話のネタにされる。

「お前はほんと愛のことになったら突っかかってくるよな」

「そんなことないですよ。だって愛さんほんとに綺麗なんですから」

徹は少し顔を赤らめながら手を必死に振っている。

「徹さん私はどうですか？」

彩夏だ。

「彩夏ちゃんもかわいいよね。若いつていいよね」

愛と茜は現在32歳。彩夏は28歳である。

徹は34歳。隆雄は徹よりも上で36歳である。

「徹さんは年下好きですか？6歳離れてても問題ないですか？」

彩夏はどことなく徹を誘っているように見える。

「やっぱり俺は年上より年下だね。でもあんまり年離れてもな」

「えゝ6歳下はだめですか」

彩夏は可愛く振る舞っている。

「そんなことはないよ」

徹はちよつと困った顔をしている。

そんな2人の会話を聞いているのは愛だけ。

2人が話で盛り上がっている横で、ちゃっかり横に座っている隆雄と茜は、小さな声で何か話していた。

彩夏と徹はまったく気づいていなかったが、愛はそんなニコニコしながらいちゃついている二人を見逃していなかった。

そんなことをしている間に、仕事10分前のベルがなった。

「あゝもう休憩終わりじゃゝん」

彩夏が時計を見ながら残念そうにしている。

「さあゝ今日も後半日頑張ろうか」

隆雄が立ち上がったってガッツポーズを決めた。

「なんでガッツポーズなの」

愛と茜が、隆雄の意味不明な行動に笑っていた。

「まゝいいじゃん、いいじゃん」

隆雄は自分でも何をやっているのかわからなくなったのか、戸惑っている。

「さっ、戻ろっ」

愛と茜は立ち上がり、隆雄に手を降りながら食堂を後にした。
隆雄と徹、彩夏も食堂にもう人があまりいないことに気付き小走りで食堂を出ていった。

第1章 2

時間はpm6:00。

愛は仕事を終え、自宅に到着した。

まだまだ冬本番、辺りはすでに真っ暗である。

愛の家は団地なので、至るところに外灯がついているため結構明るいのであるが。

「ただいま」

愛は玄関を開け、子供達に向かって叫んだ。

リビングから走ってくる足音が聞こえてくる。

「おかえりーママ」

次女の向日葵だ。

向日葵は小学校1年生。甘えん坊で愛にいつもくっついてる。

「ただいま向日葵」

愛はそんな抱きついてきた向日葵に対して、頭をよしよししてあげた。

「桜は部屋か？」

愛は、抱きついてる向日葵をそのまま連れてリビングに入り、桜がいないことに気がついた。

「うん。桜ちゃんは部屋でいるよ」

桜はだいたい自分の部屋にすることが多い。

桜は小学校5年生。向日葵とは違い、気難しい性格である。根は人一倍優しく愛のことを気遣ってくれる。ただ、表現をするのが下手なのである。

「さうご飯の用意するから桜呼んできてくれる？向日葵」

「はい」

向日葵は元気に返事をして、二階へ走って行った。

愛は帰ってくる時間が日によってバラバラなため、前の日の夜に夕御飯を用意している。

仕事の定時は５時半であるが、日によっては多少の残業をしなければならぬときがある。

遅くなる日が続き、帰ってからご飯を作っていると、子供達のご飯の時間が遅くなってしまう。

ただでさえ仕事をしていることで、子供達には淋しい思いをさせている。

そんなこともあり、前の日にご飯の用意だけはしているのである。

向日葵が二階から降りてきて、少し経って桜も降りてきた。

「愛ちゃんおかえり」

桜は愛のことを「愛ちゃん」と読んでいる。

「ただいま、桜。淋しかったでしょ」

「全然淋しくないよ」

桜はいつもこんな感じである。

「向日葵は淋しかったよ、ママ」

向日葵はすぐに甘えてくる。

「さあご飯にしようね。今日は唐揚げだよ。揚げたてでなくてごめんね」

愛はレンジの「チン」の音と同時に湯気がでている唐揚げを取り出した。

「いただきまーす」

子供達は真っ先に唐揚げを取り、美味しそうに食べている。

「愛ちゃん美味しいよ」

桜の幸せそうな笑顔が堪らなくかわいい。

「ママ、美味しい」

向日葵も負けじと唐揚げを口いっぱいにはお張っている。

愛はしばらくそんな二人を少しの間見ていたが、キッチンに向かい明日の夕御飯の用意を始めた。

愛も仕事で疲れているため、やることをとっと終わらせゆつくりしたい。

時間はpm 8:00。

愛はご飯の用意を終え、やっとソファに座ることができた。

子供達はお風呂に入っている。

愛は毎日の疲れがたまっているせいか、知らない間に寝てしまっていた。

玄関の開く音で目が覚め、時計を見ると9時をまわっていた。

「なんだ寝てたのか？」

リビングに入ってきたのは大和だった。

「悪い？」

愛はそんな大和に向かってすごく嫌な顔で答えた。

大和はその後何も言わず、冷蔵庫からビールを取りだし食卓に座って新聞を見ている。

愛は大和に言われるまえに、あらかじめレンジに入れてあった夕御飯を温め、大和の少し前へ差し出した。

大和は新聞を読むのを止めることなく、愛が置いた唐揚げを食べ始めた。

愛はいつものことなので、もう何も思わない。

愛は、そんな黙ったままご飯を食べている大和を無視し、風呂へ向かった。

風呂から出てきた愛は、そそくさと髪の毛を乾かし子供と一緒に子供部屋へ向かった。

夫婦の寝室はあるのだが、大和と寝るのが嫌なので向日葵と一緒に寝ている。二段ベッドで桜が下、向日葵が上である。

「桜、向日葵おやすみ」

愛は布団に入るとすぐに寝てしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4840z/>

禁断LOVE

2011年12月28日13時50分発行